



礼拝は実践行

学校法人四天王寺学園
常務理事

宮崎 光映

本学では卒業時に、大学生生活の思い出についてアンケート調査をしています。その回答には、友達、クラブ活動、授業などの思い出と並んで「礼拝」の肯定的な思い出を挙げる方が多くいらっしゃいます。なぜ思い出になるのでしょうか。私は、実践行を共有するからだと考えます。1000人以上の学生が同じ空間の中で瞑想や写経をする経験は、「自らを省みるための時間」であると同時に、「集中する時間」を他者と共有する実践行だと捉えるからです。

大乘仏教では、人間は誰もが仏になる種を持っていて、修行することにより悟りに至ると考えられています。瞑想

や写経は修行の一つですが、悟りに向かうために何をすべきだと聖徳太子様は説いておられるのでしょうか。『^{しょう}勝^{しゅう}鬘^{まん}経^{きょう}義^ぎ疏^{しよ}』の中には、自らが修行に精進して功德を積む「^{じりぎよう}自利行」だけでは十分でなく、他者の救済に献身する「^{りたぎよう}利他行」こそが肝要であると書かれています。聖徳太子様の教えでは、自分の修行だけでなく「利他行」が大事になるのです。例えば、嫌な仕事は自分から進んで引き受け、人様が好んでするような仕事は回してあげる。ということは、自分のことを忘れて、他人の利益を考えるとという心でなければ行えません。親が子を慈^{いつく}しむような気持ちをすべての人々に向けていくことです。

現代の予測困難な時代においては、未来をしなやかに切り拓く力が必要とされています。苦しい壁にぶつかることもあるでしょう。そんな時、聖徳太子様の教えと礼拝で経験した実践行を思い出して下さい。皆さんを守る“智慧”となり、他者を慈しみ献身する“心の種”になると確信しています。



『般若心経』の「こころ」を読む

人文社会学部 人間福祉学科
健康福祉専攻 教授

兼子 恵順

「般若波羅蜜(智慧の完成)」を主題とする『般若心経』の基本的な立場は、観自在菩薩の実践としての「^{くう}空」を明らかにして、その「空」の実践と体得とを、私達の取り組むべき課題として求めているところにあります。

「空」は実践・体得すべき仏道修行の根本課題であり、「心にとどめつつも、それにとらわれない」という「とらわれない態度」を意味します。「とらわれない態度」とは、心と行いにおいて「物事に執着しない」ことで、我執(自己中心性や利己性)の立場で物事を考えたり行動したりしないことをいいます。

『般若心経』には「智慧第一」と称せられた舍利子に対する仏陀釈尊の説法として、観自在菩薩が「とらわれの

ない態度」の実践によって、人間としての正しい在り方・姿を体得した存在となったことが教えられています。

こうした観自在菩薩の「とらわれのない態度」の実践と体得とを、自己の課題とすべきことを『般若心経』は求めているのですが、観自在菩薩は「観自在」として諸法の実相の観察に自由自在であり、その基盤をなす「とらわれのない態度」の実践によって自らの悟りを求める「自利」の存在であると同時に、「大乘の菩薩」として一切衆生の救済を誓願し、他者の悟りの実現のために惜しみない努力を払う「利他」の存在でもあります。

「観自在菩薩」の持つその特性に照らして、『般若心経』は「とらわれのない態度」に基づく「自利・利他」を実践して、人間としての正しい在り方・姿を体得することが私達の取り組むべき課題であることを教えるものであり、観自在菩薩を範として「とらわれのない態度で自利・利他を実践せよ」「とらわれのない態度に基づく自利・利他の実践によって、人間としての正しい在り方・姿を体得せよ」という仏陀釈尊の「こころ」を今に伝えるもの、それが『般若心経』であると私は理解しています。

❖ 縁起と空

本学名誉教授

古泉 圓順

十二月八日の黎明、明星の輝くときに、菩提樹の下で、お釈迦様が悟られたのは、「縁起」であったと言われています。「縁起」こそは、仏教の根本なのだ、その他は全て「縁起」を説明するための手立てなのだ、と、説く人すらあります。またその内容も、当初は簡単なものであった筈だが、後世に理論化されて、現在伝わる「十二因縁」「縁起説」になったのだと言います。



さて「十二因縁」「縁起説」とは、先ず「無明」によって、生活作用＝「行」があり、生活作用によって識別作用＝「識」があり、識別作用によって、名称と形態＝「名識」があり、名称と形態とによって、六つの感受機能＝「六処(眼・耳・鼻・舌・身・意＝六感)」があり、六つの感受機能によって、対象との接触＝「触」があり、対象との接触によって、感受作用＝「受」があり、感受作用によって妄執＝「愛」があり、妄執によって執着＝「取」があり、執着によって生存＝「有」があり、生存によって出生＝「生」があり、出生によって老いと死＝「老死」があり、憂い、悲しみ、苦しみ、惑い、悩みが生ずる。その根源は「無明」＝ものの道理の判らぬ無智なのだ、これが「縁起説」です。つまりお釈迦様の教えは、人々は「苦しみ」の存在であると言うところから出発しています。その「苦しみ」をどのようにすれば解決出来るのか、これこそが仏教の命題なのです。

比較的古い時代に成立したとされる『金剛般若経』には、次のように説かれています。「およそ生きものの仲間を含められるかぎりの生きとし生けるもの、卵から生まれたもの、母胎から生まれたもの、湿気から生まれたもの、他から生まれず自ら生まれ出たも

の、形のあるもの、形のないもの、表象作用のあるもの、表象作用のないもの、表象作用があるものでもなく、無いものでもないもの、その他生きものの仲間として考えられる限り考えられた、生きとし生けるものども、それらのありとあらゆるものを、わたし(仏陀)は「悩みのない永遠の平安という境地に導入しなければならない。」

「苦しみ」のない世界に人々を導入することが、お釈迦様の願いであったわけです。で、どのようにしたら「苦しみ」が無くなるのか?『金剛般若経』は更に説きます。

「求道者、すぐれた人々は、とらわれない心をおこさなければならない。何もかにとらわれた心をおこしてはならない。形にとらわれた心をおこしてはならない。声や、香りや、味や、触れられるものや、心の対象にとらわれた心をおこしてはならない。」

この対処法として、『般若心経』は、「無明」が無ければ、「無明」の尽きることもなく、乃至、「老・死」がなければ、「老・死」の尽きることもない。それが「般若」の智恵で観察し解決してゆく状態、「空」なのだ、と説きます。

ただ「空」というスタンプを捺してもらえば、一気に「無明」が解決するわけではありません。「空」とは一切万有の存在を否定した言葉のようですから、「有」に対する「無」を意味しているようにも思えます。しかし万有を無として、その存在を認めないということではできません。現に私たち自身と周りの存在、大きく言えば宇宙そのものを否定することはできないからです。「空」は無の意味ではなく、存在する事物に対して持つ執着を、限りなく排斥し続けることが「空」なのです。

「空」を実現する生活規範として、仏教は「八正道」を説いています。物心両面にわたって正しい生活をすることによって、「苦しみ」を超えることができるのです。

そして私たちの生命がある限り「空」の追求は続くのです。

平成25年度 仏教I・II学生の声 — アンケートにもとづいて —

夏学期の学生アンケートの「自由記述欄」は全てを抜き出し、各学科専攻の関係教員にも見ていただき、「レポート回収の時間が早い」「瞑想中に欠穴確認の靴音が気になる」などの意見は、冬学期に改善を図りました。音響や空調、講話資料の提示方法などの要望のほか、「私語をする学生にはもっと注意してほしい」という声がちらほら見えました。アンケート項目「私語などで他の学生に迷惑をかけてこなかったと思いますか」に対する回答結果は、大学平均が4.55、短大平均が4.69(5＝そう思う/1＝そう思わない)と、静穏な環境作りへの学生の意識は極めて高いものがあります。だからこそ、一部の私語には「何とかならないか」という困惑が見取れます。公共の場所では一人一人が「いかにあるべきか」を考え、快適な環境作りの一員となってください。

冬学期は毎回20分ほどの写経を行いました。受講生はどんなことを考えて取り組み、どのように感じているか、いくつかの学科専攻の学生にお願ひし、自由記述式のアンケートに答えてもらいました。まず「どのような気持ちで写経を行っている

か」への回答です。「無心」を基調として、「腹式呼吸を心がけて、いかに無心で行えるかと、自分との勝負をしています。」(教健 山本美玖)、「今は筆ペンを使う機会すらあまりないので、いつも新鮮です。筆独特の味わいが出るように気をつけています。」(教小 浅沼美咲)、「無我夢中です。書き終えてから『ここはもっとこうすれば…』と考えるようにはしていません。」(日本 東達也)、「自分の心を落ち着けて清らかな気持ちで書いています。」(経営 K.T)、「一週間の自分を振り返り、自分をほめたり、反省したりして、次に生かしたいという気持ちで行っています。」(教小 Y.T) つぎに「何かいい影響を感じるか」について、「静かに一つのこと集中する時間があることがとても嬉しい。」(短大保育)、「字を書くのが最近好きになってきました。」(経営 H.Y)、「写経をすることだけに集中し、頭がとても動いている気がする。初めて写経をやってみて、とても楽しく、清らかな気持ちになる。」(教小 N.K) などなど。紙面の関係で紹介しきれませんでした。ご協力くださった方々ありがとうございました。(矢野野 隆男)

第4回 卒業生インタビュー

話し手：西 英則(にし ひでのり)さん 平成18年3月 社会学科卒業生 大阪刑務所刑務官
聞き手：大関 雅弘(社会学科学科長)
桃尾 幸順(仏教I・II講師・日本学科講師 本欄編集)

剣道について

今の仕事である刑務官を目指したきっかけは、父や祖父が刑務所に勤めていたことがまずあげられますが、子どもの頃から親しんできた剣道を続けることができる環境があるからというのも大きいです。大学に入学した当時は、将来のことについてあまり考えていませんでしたが、大学の授業で犯罪心理学を学んだことや、剣道部の先輩が就職活動をする様子を見たことで、将来の仕事として刑務官を意識するようになりました。当時、剣道部では公務員になる人が多く、先輩方だけではなく私と同期の二人も警察官と教員になりました。人間関係も剣道部で培われた部分が大きいです。とくに先輩や後輩との関わりは社会人になってから役に立ちました。剣道はまた、仏教との関わりも深いと思います。瞑想は剣道の中にも取り入れられて、日常的に行っていることでしたし、写経で心を落ち着け集中することも剣道につながっています。実際、剣道をやっている人で書道もやっている人は多いですし、私も在学中から写経をすることは好きで、剣道部の部室でよく写経をしていました。とくに大学のコンビニで売っている写経用の筆ペンは使いやすく、今でも後輩を指導しにくる際に買って帰ったりしています。

刑務官の仕事について

刑務官の仕事は非日常的な仕事ですので、仕事に入るときに気持ちを切り替えることが大事になります。ですから、私は制服に着替える時、心の中で瞑想を行って気持ちを切り替えるようにしています。この大学で行っている授業前の瞑想も切り替えの意味もあると思いますので、学生の皆さんにもその価値を理解してもらいたいです。社会人になってからも気持ちの切り替えはとても重要ですから。この瞑想は剣道でも黙想としてやっていることです。

今の自分の仕事は工場の担当なのですが、まず朝、それぞれ受刑者に腕の振り方まで指導して、隊列を組んで工場に向かいます。その際各部屋の様子もチェックしておきます。工場に着いてからは、わき見、雑談は一切させずに、作業に集中させます。細かいことを指導するのも、ルールを守ることを習慣づけるためです。作業中は主に1人で50人の作業を監視しながら、受刑者の要望などの書類を処理しています。

受刑者からは先生とも呼ばれますが、おやじと呼ばれることが多いです。受刑者との個人的な関わりは禁止されているので、話などはしませんが、例えば家族からの手紙の中には、離婚の申し入れのようなものもありますので、その際は注意深くその受刑者を見守ることになります。またちょっとした違反であっても、叱ることになりますが、受刑者は叱られることで、「おやじは自分を見てくれているんだ」と感じることで、それが一種の信頼関係の形成になります。

逆恨みを受けることもよくあります。基本的に受刑者は刑務官を敵とみ

ています。とくに私の勤めている施設は犯罪傾向が進んでいる累犯が多く、刑務官の方も受刑者に対して厳しく扱う傾向にあります。受刑者と刑務官が対立してしまうと、仕事を難しくするだけではなく、受刑者の社会復帰にも悪影響を与えることになるので、避けなければなりません。そのため受刑者に恨まれたり嫌われたりしても、感情的にならずに冷静に対処する必要があります。また逆に受刑者に近づきすぎることよくないので、適切な距離をとることが大切になります。

刑務官の仕事は楽しい仕事とはいえないので、離職率は高いです。ただ社会において必要不可欠な仕事であり、使命感を持って行えばやりがいのある仕事です。これは他の公務員も同じだと思います。本学は小中学校の教員を含めて、公務員を目指す人が多いと思いますが、ぜひ社会のために働けることに喜びを感じてほしいです。



学園訓と刑務官の仕事

2300名の受刑者に対して、常時200名くらいの刑務官で対応するので、刑務官が一枚板で団結していなければ、受刑者に付け入る隙を与えることになりかねません。ですから和の精神はとても大事です。普段は少人数の刑務官で多くの受刑者に対応しているのですが、非常事態が起きた場合には、一挙に50名くらいの刑務官が駆けつけます。その団結力があるからこそ、受刑者を管理することができるのです。礼儀に関しても受刑者に日頃から指導しています。また刑務官自身が礼儀の面でも受刑者の見本にならなければならないので、日頃からそのことは意識しています。とくに服装に関しては、受刑者に接する前に、休憩室に置いてある鏡で乱れがないかチェックするようにしています。これは就職した時に、指導されたことなのですが、実際に毎日行っていると、気持ちを切り替え引き締めることにつながっていることもわかります。

在学生へのメッセージ

授業のとらえ方が大切です。仏教の授業にしても授業だと考えると退屈に思えるかもしれませんが、今までお話ししてきたように瞑想や写経は社会に出てからも役に立つことですし、講話の内容も人間形成にかかわる話が多いので、社会に出てから役立つことが多いですし、学生生活の中でも生かせる話もあると思います。後になって気づくこともあるので、ぜひ今、目の前の授業に真剣に取り組んでほしいと思います。

平成25年度冬学期「仏教II」講話題目

- | | | | |
|--------|---------------------------------------|--------|--|
| 9月19日 | 桃尾 幸順先生「オリエンテーション」 | 11月28日 | 藤谷 厚生先生「縁起について」 |
| 9月26日 | 学長 西岡祖秀先生「写経の意義」 | 12月5日 | 今井 真理先生&学生(田中 泰資さん、由利 展一さん、成井 駿太さん、千手 友樹さん、島田 翔太さん)「人權週間にちなんで」 |
| 10月3日 | 兼子 恵順先生「写経の歴史-「お経」の成立と「写経」の始まり」 | 12月12日 | 桃尾 幸順先生&学生(喫煙マナー向上委員会委員長 山本 隆也さん、大迫 隼樹さん)「学内の喫煙マナーについて」 |
| 10月10日 | 藤谷 厚生先生「写経の功德」 | 12月19日 | 高山 暁美先生(藤井寺保健所保健師)「一緒にたばこについて考えてみましょう」 |
| 10月17日 | 坂本 示洋先生&学生(東 陽太さん、小林 健太さん)「海外体験について」 | 1月9日 | 矢羽野 隆男先生「学園訓について-和・報恩・誠実・礼儀」 |
| 10月24日 | 桃尾 幸順先生「般若心経について」 | 1月16日 | 矢羽野 隆男先生「終講に当たって」 |
| 10月31日 | 兼子 恵順先生「般若心経とは」 | | |
| 11月14日 | 藤谷 厚生先生「菩薩の精神」 | | |
| 11月21日 | 源 健一郎先生「無常-今を生きる私たちにとって 古典文学の世界を通じて-」 | | |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 大聖勝軍寺（八尾市） —

藤井寺市の北に位置する八尾市は、難波と大和とを結ぶルートに沿う古い歴史をもつ土地です。JR八尾駅から南へ10分ほど歩くと、国道25号線（旧奈良街道）との交差点に「太子堂」の標識が見えます。地名から連想されるように、ここには聖徳太子ゆかりの「上の太子」叡福寺（太子町）、「中の太子」野中寺（羽曳野市）と並び、「下の太子」として知られる大聖勝軍寺があります。

別名「棕樹寺」ともいう勝軍寺の起源は飛鳥時代、蘇我馬子と物部守屋との合戦にさかのぼります。寺伝によると、物部氏の本拠地であったこの一帯では激しい戦闘が行われ、蘇我氏の戦陣にあった当時16歳の聖徳太子は、守屋の軍勢に包囲され、絶体絶命の窮地に陥りました。そこに棕の大木があり、太子が「私には救世の本願がある。この危難を救いたまえ」と念ずると、幹が二つに割けて体を包みこみました。危機を脱した太子は、白膠木に四天王像を刻んで戦勝を祈願し、勝利を収めました。四天王の加護に報いて建立されたのが四天王寺ということをご存知でしょうが、この棕の木に感謝して建てられたのが勝軍寺で、「神妙棕樹山（神妙な棕樹の寺）」という山号はこれに由来します。さらに太子は自身の姿を刻んだ像に自らの頭髪を植えて本尊（植髪太子像）としたということです。



太子堂

国道に面したお寺の正面に立つと、まず「佛法元始聖徳太子古戦場」と刻ん

だ大きな石標が目に入ります。その後四天王に守られた聖徳太子の石像、さらに進むと山門に「仏法最初太子堂」「聖徳太子開基・推古天皇

祈願所 大聖勝軍寺」の額が掛り、聖徳太子との深いつながりを感じさせます。

堂塔が所せましと建ち並ぶ境内、その正面に太子堂があります。めったに開帳されないという植髪太子像がここに祀られていましたが、現在は背後の祈願所に安置されています。山門のすぐ右手の三抱えもありそうな古木は、太子の命を救った「神妙棕樹」の子孫で、今は枯れて根元が残るだけですが、隣には次の世代の棕が力強く枝を張っていました。さらに右奥に朱塗りの柱も鮮やかな「平和塔」という二重塔が見えます。塔の内部には聖徳太子像とともに、敗れた物部守屋の像も祀られています。「ここは四天王寺と法隆寺との中間にある太子ゆかりの地。戦場となったこの地で、敵味方なく対立を超える仏教の『和』の教えを広めようとされたのではないのでしょうか」と、ご住職は話してくださいました。

すぐ近くに、守屋の首を洗った守屋池、守屋を射た矢を埋めた鏑矢塚、守屋の墓などの史跡もあります。太子堂へは藤井寺駅前から近鉄八尾駅行きのバスで20分ほど。すこし足を延ばして、太子の時代に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。（矢羽野 隆男）



神妙棕樹

仏教のことば

— 回向 —

お経の最後に唱える文句を回向文といいますが、この回向とは、「回転すること」「転向すること」「変換すること」という意味のサンスクリット語の Parīṅamanā（パリーナーマナー）の漢訳語です。回は「めぐらすこと」、向は「差し向けること」で、大乘仏教の特徴的な考え方を表しています。

仏道の修行では、悪い行いをせずに善い行いを積むことが求められます。したがって、自身が善い行いをすることによって得ることの出来た功德を、全ての人々の悟りのために他の人に差し向けたり、与えたりすることが回向になります。

寺院の法要等で物が供えられたり、お経が唱えられたり、法が説かれたりして故人を供養するといっているのも、仏様に供養することで得た功德を、その故人に対して回し向けているということの意味しています。法要を営み、後から善を積むことを追善回向ともいいます。回向の心は先祖や周囲の人々への感謝や反省と、多くの人々によって支えられて生きる自らの自覚や心構えを表す心にもつながるわけです。

（上續 宏道）

編集後記

冒頭の宮崎常務理事のお話から、その次の兼子先生へは「利他」の話題で、兼子先生から古泉先生へは「とらわれない心」の話題で、それぞれは「数珠つなぎ」のように連なっています。「仏教の教義」と聞くと難しくそうで、学生の皆さんは身構えてしまうでしょう。しかし、先生方が若い皆さんに伝えようとして下さるお話の要点は、案外シンプルなことですし、私たちのふだんの生活に身近で、大切な問題でもあります。

「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業や、本誌「UPĀYA ウパーヤ」を通じて、IBU在学中に、仏教思想の一端に触れてもらいたいと念じます。（K.M）

研究所員紹介

所長	西岡 祖秀 (学長・教授)
主任研究員	矢羽野 隆男 (教授)
研究員	兼子 恵順 (教授)
	藤谷 厚生 (教授)
	源 健一郎 (教授)
	上續 宏道 (准教授)
	桃尾 幸順 (講師)
	南谷 恵敬 (客員教授)

UPĀYA (ウパーヤ) 4号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。
平成26年3月1日発行
発行 四天王寺大学
仏教文化研究所 仏教教育センター
所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1
TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611
URL: <http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPĀYA (ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail soumu@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

